

株式会社ヒューマンシステムの紹介

～持続的な成長を支える P2M のプロジェクトマネジメント～

株式会社ヒューマンシステム 湯野川恵美

1. 企業概要

ヒューマンシステムは、港区の芝（最寄駅三田・田町）でシステム開発を 1992 年の創業から現在まで続けて来た会社である。社員数は 125 名、売上は 15 億程度、平均年齢が 32 歳という若い会社であり、主要顧客に NEC、日本経済新聞社、東急コミュニティー等。また、株主として日経新聞社の出資を受けているということが多少珍しい特徴となっている。役員は代表取締役を除いて外部取締役、執行役員に社員を置く組織構成となっている。

主力とする事業は SI（システムインテグレーション）。SI とは、顧客からシステムを構築する仕事を直接請け負い、システムの企画、設計、開発からテスト、さらには導入や保守運用までを一貫して提供するサービスで

ある。SI 以外では、大手 IT ベンダからの発注を受けてシステムの開発に絞った受託開発、現状分析や課題抽出といったシステム導入の入口となるコンサルティングサービス、自社ブランドのサービスを展開するビジネスソリューションサービスなども行っている。

開発規模は、金額で数十万円から数億円、時間にして数時間から 3 年がかりといったものまで幅広く受注し開発を行っている。SI 事業の具体的なものとしては、株主でもある日本経済新聞社のサイト（日経電子版/日経 DUAL/日経カレッジカフェ/日経キャリアネットなど）や、ローソンでおなじみのオレンジのタヌキの Ponta カードの会員システム、全国の宝くじの 6 割を取り扱う販売会社の販売管理

システムなどを長く手がけてきた。これらのシステムは市販のパッケージでは実現できない特殊性、複雑性をもち、時には他社が撤退したものを引き継ぎ、短納期で高品質、納期通りに開発が行えるという



図 1.日経キャリア

強みを持っている。そして、この強みはSIに限らず、受託開発、SESなど他の事業でも発揮されている。

2. プロジェクト管理でワークライフバランス向上

P2Mのプロジェクトは、どのようなシステムが事業価値を上げるかの構想を立てるスキームモデル、しくみを開発して創り上げるシステムモデル(PMBOKと同様のQCD管理)、創り上げたシステムが事業価値の向上に繋がるように調整を行い、しくみ化するサービスモデルで構成される。

P2Mのプロジェクト管理以前の弊社のシステム開発では、システムモデルを請け負ったにも関わらず、構想段階までさかのぼって検討を行い、結果としてプロジェクトが破綻する

というようなこともあった。P2Mの3Sモデルを学び、スキームモデルからシステムモデルへの引継ぎの情報とマイルストーンを正しく管理することで、プロジェクト全体の進捗管理が正しく行われ、大きなトラブルが少なくなった。また、開発中であっても、スキームモデルの構想の範囲であれば、「ゼロベース」で開発方針を見直すなど柔軟性の高いプロジェクト管理ができるようになったのもP2Mのプ

ロジェクト管理を学んだ成果である。こういったプロジェクト管理の向上により、定着率が向上し業績も向上し、さらに東京都のワークライフバランスの認定を受ける、子育てサポートくるみんマークの認定を受ける、エンパワーメント大賞の奨励賞を受けるなどの成果となり、効率よく働きやすい職場環境をつくる活動にもつながっている。

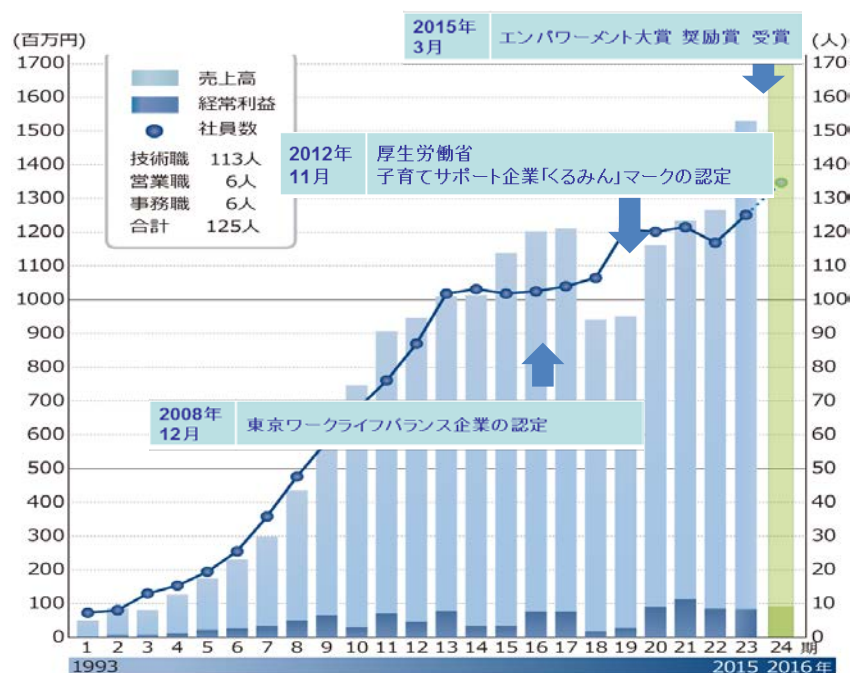


図 2. ヒューマンシステムの沿革

3. 持続的な成長を支えるP2Mのプロジェクトマネジメント

P2Mにおいて「プロジェクトマネジメント」は、「その範囲と目的を明確にして、確実に成果を獲得する為のマネジメント」と定義されている。そして、プロジェクトマネジメントは、もともと事業価値を向上することが成果であり、システムが出来上がることがゴールというわけではない。一方で、定常活動に入ったシステムであっても、時間とともにシステムが陳腐化し

たり、生み出す価値が少しずつ減少していく。また、事業を取り巻く外部環境は常に変化が伴うため、その都度新たなしくみの変更やシステムの改修を必要としている組織は多い。こうして、次々と改修を行っていくことで持続的な改革を実現する。P2Mのプロジェクトマネジメントを実践し続けることは、顧客のビジネス価値を創造する活動を継続的に支援し、お客様へのパートナーシップをもって仕事に取り組む基盤としても有効である。

企業が持続的な成長を続けていくために、ITシステムはありのままの姿を数値化し、「課題を見つけ」「改善する」ための有効なツールであり、もはやITは経営の一部であるといっ

ても過言ではない。これからのITは、ビジネスに貢献できるITシステムであることが重要であり、様々な開発の経験とDBの技術等に加えて、ビジネス視点で開発を捉えるP2Mのプロジェクト管理を徹底し、実践していくことが大切である。

P2Mを活用することで、お客様のビジネスへのおもいを形にし、持続的な成長を支えるITシステムの開発やサービスの提供を行うことを目指している。そして、それを実践し続けることがお客様へ「おもいやり」のあるサービスを提供してゆくことであり、ベストパートナーへの第一歩だと考えている。

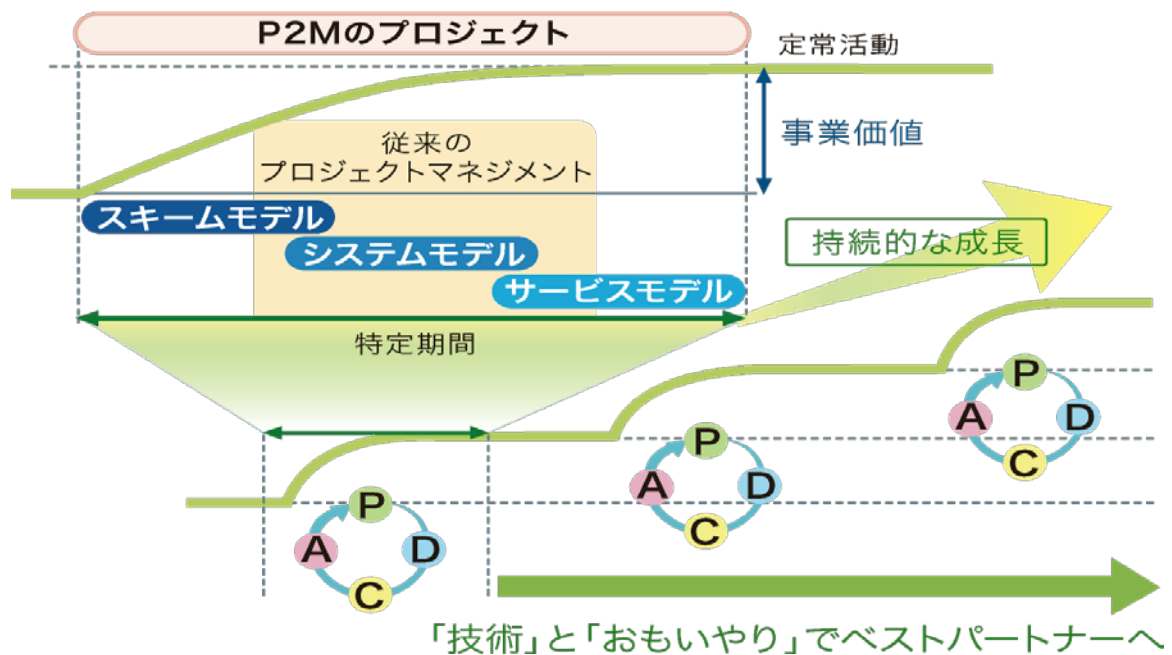


図3. 3Sモデルで持続的な成長を支える